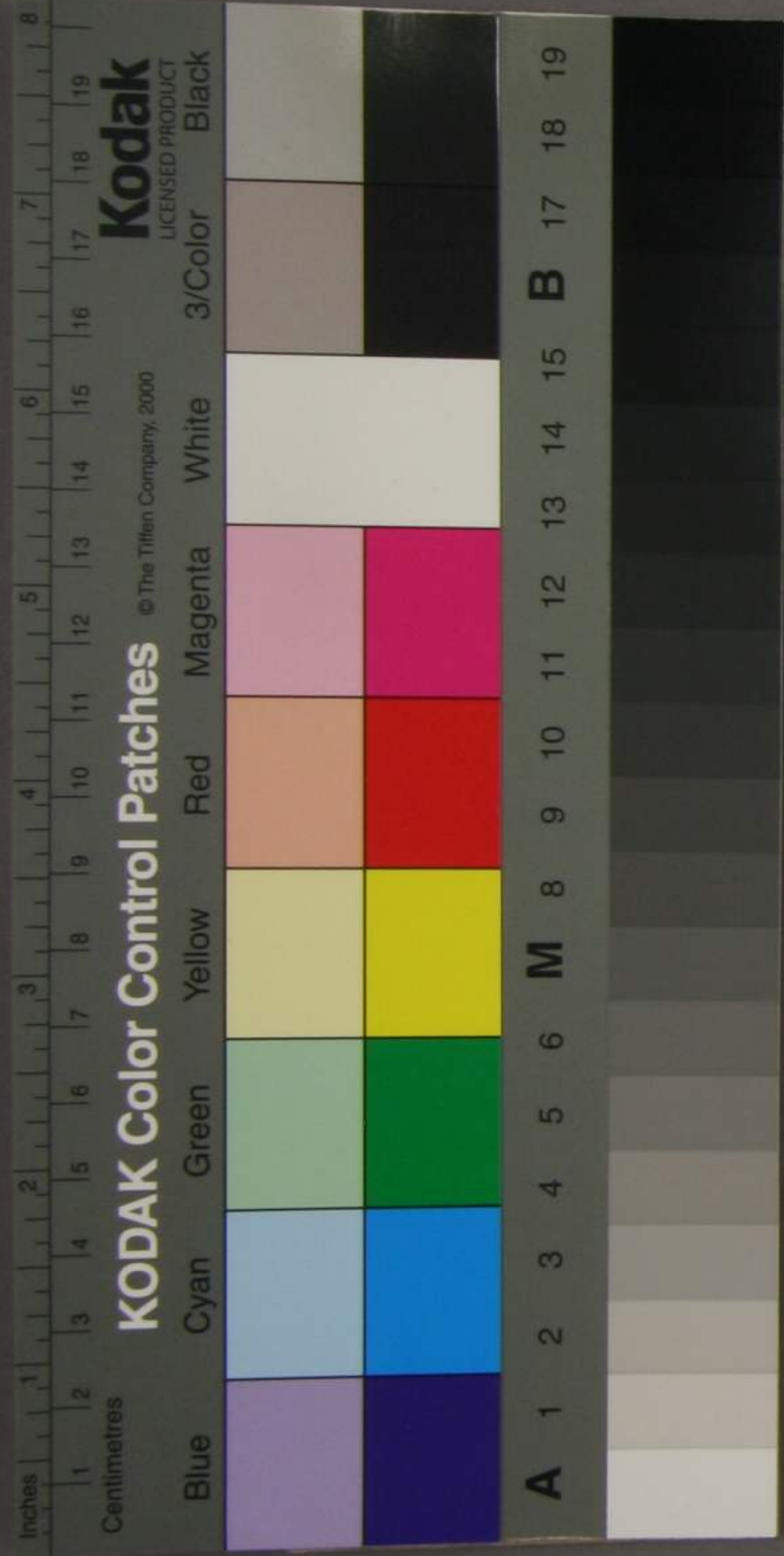




214
A1064

別紙建言ノ主意ハ乍恐明治元年
聖上御東行ニ供奉セシ際交易通商ノ爲メ輸出
入不平均及我國損害ノ大ナルヲ慮リ知レハ私
浅智短見ト虽氏通商上ニ於テ此損害ノ幾分ヲ
抑止シ到底富國ノ根本ニ歸セシメント日夜之
ヲ思ヒ念フテ止ミ難ク翌二年御再行ニ供奉
セシ後通商ノ順序ヲ調査シ漸次完設セント欲
シ先ツ洋船ヲ以テ運輸スルヲ勞ニ着ト定メ
而シテ同年九月廻漕ノ業務ヲ完シカ此際横
濱港ニハ外國商船我國ノ諸港ヲ航海スル船凡

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈



五十餘艘モアリツレニ同三年十一月ノ頃漸々
減少セラ僅カ十二三艘ニ至レリ右ハ該年ノ初
メ廻漕會社ヲ置キ政府ノ保護ニ由リ廻漕ノ
順序ヲ得タルヲ以テ此ニ及ヒナリ然レニ社
中ノ論議紛然一ナラス既ニ北海ノ運輸ヲ止メ
ラレタルカ爲メ私儀微カナカラモ尼招使御用
達ヲ以テ專ラ北海道ノ運輸ニ盡カシ加之支那
國ニ先ニ航海テ彼國ノ通商實際ヲ探偵スルニ
隨ヒ之ヲ政府ニ上申シ尙ホ同盟ヲ結ビ支那通
商及海上危難受員會社設立ノ儀ヲ天上申セシ

處尼招使特別ノ保護ニ由リテ右二件ノ許可ヲ
得タリ因テ海上危難受員會社ヲ保任社ト稱シ
支那通商會社ヲ北海道商會ト稱シ上海ニ於テ
ハ尼通洋行ト稱シテ專ラ通商ヲ行ヒニ同盟
ノ膽力不振只私論ニ涉リテ國家ノ實用ヲナサ
サルヨリ不得止右顛末及方法變革等ヲ上申シ
又各國通商ノ爲メニ大會社設立ノ件ヲ毎歲
上申ニ及且ツ郵便會社改正及補助金貳拾五萬
圓御政府ヨリ下付セラルベキノ件其他商船會
社及高船學校設立ノ件等ヲ上申シタリシカ

明治七年佐賀及臺灣事件有之ヲ以テ右御用向
相勤メシニ同年十一月ニ至リ前記上申ノ件々
何レモ御採用ナルトキトノ御内意ヲ蒙リタレ
此組合同盟ノ内小野組島田組外面名ハ不幸ニ
シテ両店トナリ又私ニ於テハ北海道數ヶ所一
支店ヲ置キ右罷業ノ爲メ罷托便ヨリ借用ナシ
タル金貸アリト虽モ千古未罷ノ地新規ノ創業
ニ并具損害ナカラズ一時ノ返納ヲ怠リシ折
柄明治八年三月豈計シマ罷托便ヨリ御尋問
ノ節之アル迄テ親類預ケノ身トナリ同九年

一月ニ至リ尋問ノ康ヲ以テ預ケ置タレトモ更
ニ許ストノ御達アリ斯ク徒ニ年ヲ経過シ之カ
爲メニ百事^ノ如クナラス時機ノ再ヒ得ベカ
ラサル紙筆ニ盡シ難ク且ツ前件支那通商ノ振
ハガルカ爲メ方法變革ノ上申御採用ナリタル
者ハ即チ目今ノ廣業商會ナリ
此件ハ御採用ナリタレハ大
會社設立ノ件ハ今ニ御採用
お成ラス是レ全ク御政府ノ保護ニ由リテ幾部分
ノ國益ヲ興スト虽モ未タ深遠ノ大利ヲ得ルニ
至ラザルベシ且又明治八年私御預ケ中ナレ氏
切要缺クベカラサルノ二大件ヲ華族諸公

ニ建白ス 即チ危難受買會社トレ其ニヲ危難受買會社ハ目今ニ於ル保險會社ハ法アリ然レハ
併中ノ主意終ニ貫徹ヤス抑明治元年以來外國
通商ノ爲メ輸出入ノ差アルヲ以テ我國カノ衰
弱ヤンヲ憂ヒ一身ノ便益ヲ顧ニス一ノ商會
ヲ起シ以テ之ヲ止メント欲シ漸ク江湖組ト称
セシ會社ヲ設立セシル事故アリテ之ヲ廢シ更
ニ樂産商會ヲ設ケ眞實國益ヲ謀ラント欲スレ
ニ資力充足ス然ルニ今春ニ至リ洋銀及物價
ノ大ニ騰貴セシハ建言書中ニ辨明セシ如ク
僅少ノ資金若シクハ二三ノ智者達人アリト魚モ

何ソ能ク之ヲ救ハン然ラハ此時ニ當リテ政府非
常ノ保護アルニ非ンハ物價愈騰貴シ人民ノ困窮
實ニまづベカズ隨ツテ容易ナラサル國害ヲ招クニ
至ラン且ツ今ヤ各國條約御改定ノ由若シ輸出入
不平均ノ爲メニ其宜ヲ得サレハ外國ノ情トシテ
我國ノ困難ニ果ニ何様ノ儀申出ルモ測リ難ク彼
星危急切迫ノ折柄前者ノ件々委詳以別紙建言仕
候間速ニ閱覽アラント奉懇願候謹白

府下北豐島郡下谷金板村五十二番地

明治十三年八月

木村萬平



